

◆土師質の当具について

飛鳥池遺跡（飛鳥藤原第93次調査）からは、土師質当具2点（42頁、図48）が出土している。ここでは他遺跡の出土例も含め、当具とそれを使用して作られた土器について考えてみたい。

まず土師質当具について説明しよう。飛鳥池遺跡で出土した当具1は土師質。胎土は砂粒を含み粗く、明橙色を呈す。当部中央付近に黒斑がある。全形は葎形で当部が直径7.0cmのほぼ円形、握部は一辺2.5cm、長さ1.5cmの直方体状をなす。当部はやや外膨らみのカーブを描き、無紋。外側に数箇所の傷がある。表面の調整はナデ。当部と握部の接する部分は指押さえによるくぼみがある。当具2も土師質。胎土は密で、淡黄色を呈す。当部中央付近と握部に黒斑がみられる。全形は葎形で、当部が直径4.4cmのほぼ円形、握部は長さ1.0cm、断面1.8×1.4cmの楕円形を呈す。当部はわずかに外膨らみのカーブを描き、無紋。表面の磨滅が著しいため調整は不明である。

平城宮第18次調査出土の当具（図19-1）は土師質。胎土はやや粗で、黄褐色を呈す。当部上面から側面にかけて黒斑の付く箇所がある。全形は截頭円錐形。当部は直径7.8cmのほぼ円形で、

握部は長さ8.0cm、断面は上端部で直径3.9cmのほぼ円形をなし、当部に近づくにつれて太くなる。当部はやや外膨らみのカーブを描き、無紋。調整はナデで、握部にはてづくねで成形した際、握り出した指の痕跡が明瞭に残る。

飛鳥池遺跡の当具は共に上層の工房作業面から出土しており、他の出土遺物からみて7世紀後半のものである可能性が高い。平城宮出土の当具は、8世紀以降の包含層から出土している。

上記の当具に共通するのは①土師質、②有黒斑（野焼きである）、③当部が無紋、の3点である。①・②から、当具は土師器と同じ焼成法によっており、これらの当具は土師器を作るための道具であった可能性が高い。それでは7世紀から8世紀にかけてつくられた土師器に、③無紋の当具を使用してつくられた痕跡はあるのだろうか。

7・8世紀の土師器甕のなかには、内面底部から体部にかけて円形状の凹面がみられるものがある。また外面に内面の凹面に対応して平坦面も観察できる場合がある。これは成形の際内面に当具を当てがい、外面を叩いたためと考えらる。ここで今一度土師器甕内面の当具痕を詳しく観察してみると、さまざまなタイプのものがあることがわかる（図20-3～6）。3・4には浅く丸

く凹んだ痕跡がある。凹面のなかには微少な凸部がついており、それがそれぞれ同一の形状を有し、かつ、同じ位置関係を保っている。したがってこの凹面は無紋当具の当たった面で、凸部は当具本体の傷もしくは亀裂が、甕の器面にスタンプされたものと推定される。実際飛鳥池遺跡の当具1には当部上面外側に数カ所の傷があり、この部分を当てがった場合、4のようなスタンプ痕がついたであろう。5・6は共に同心円紋がついているが、5は当具に同心円の刻みを入れたもの、6は無紋の木製当具の木目部分が浮き出たものと考えられる。

以上の事実から、7・8世紀の土師器甕には叩きの技法で作られているものがあり、甕内面に残る当具痕から当具は、土製や木製、有紋か無紋かなど多様であったことがわかる。民族例では当具に円石を使用したり、手を当てる例も報告されている。実際、土師器甕内面に小さな窪みがみられる場合もあり、断定はできないがこれらの方法で製作していた可能性も残る。ともあれ今回紹介した3点の当具は、土師器甕を製作するに際し、その技法の一つとして、土師質無紋当具を使用していたことを裏づける資料といえよう。

（渡邊淳子）

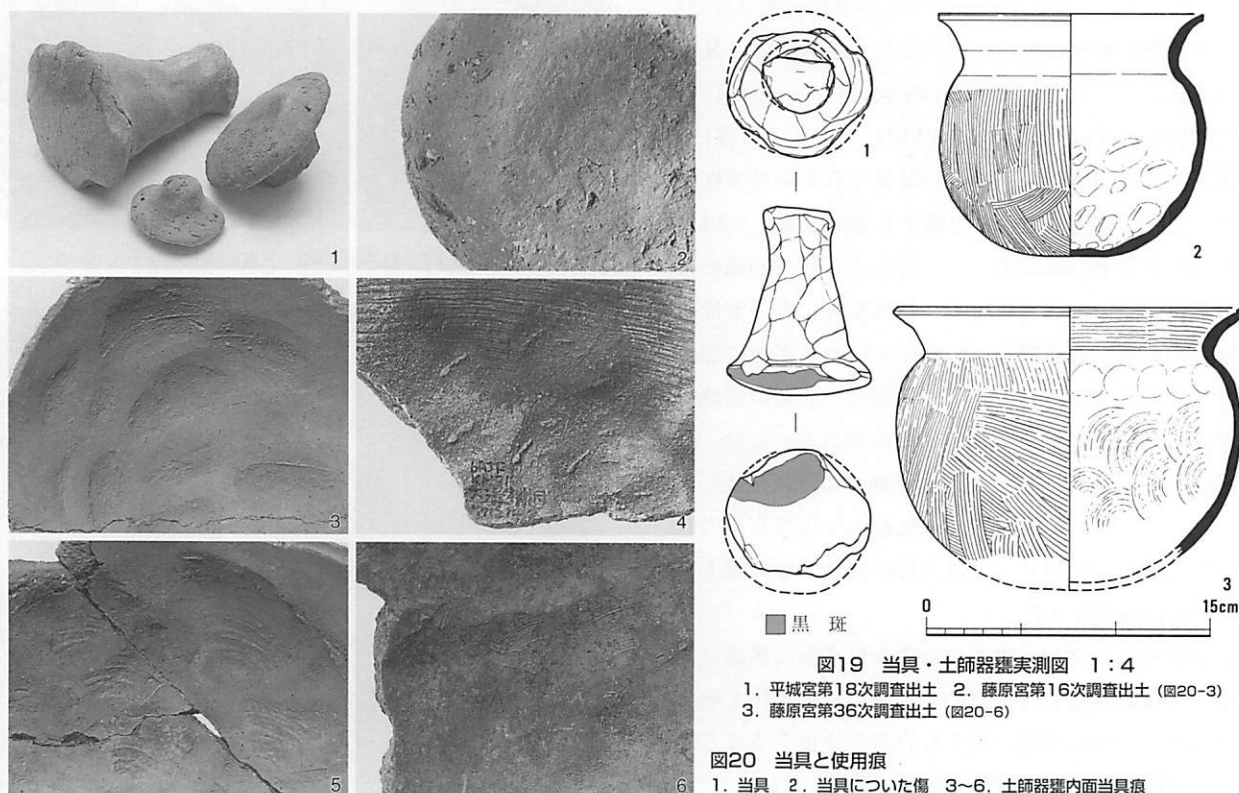


図19 当具・土師器甕実測図 1:4

1. 平城宮第18次調査出土 2. 藤原宮第16次調査出土（図20-3）
3. 藤原宮第36次調査出土（図20-6）

図20 当具と使用痕

1. 当具 2. 当具についた傷 3～6. 土師器甕内面当具痕